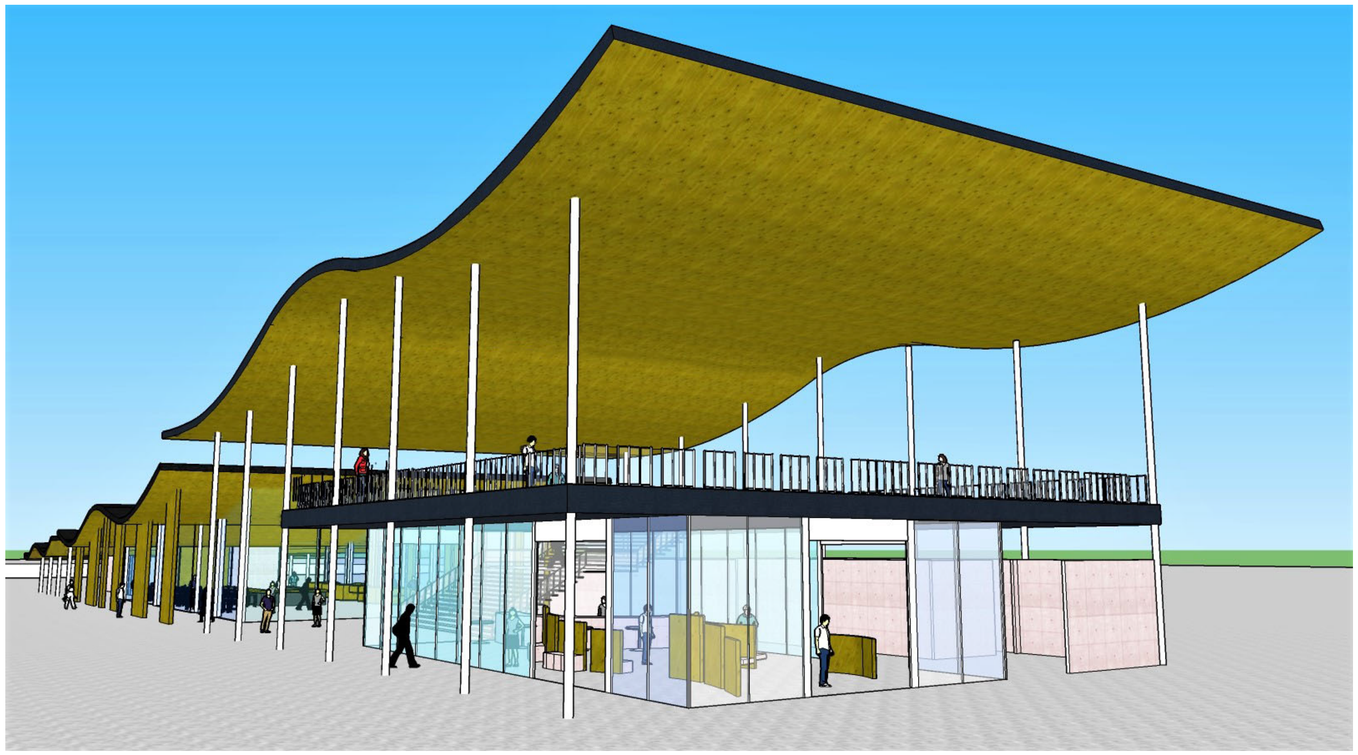
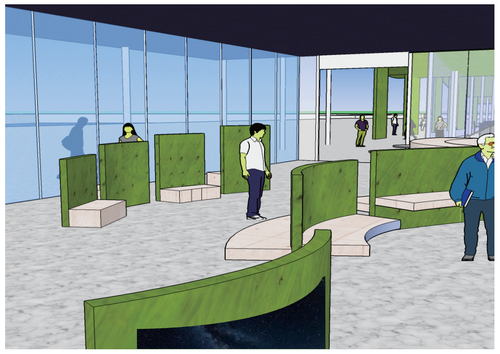




□ギャラリーウォール（待合室＆回廊）

より人の目に触れてもらいたいという思いから展示室という固定された空間ではなく、待合室や回遊スペースにギャラリーウォールを設け、人の視界に入るようにした。待合室には、椅子に展示をし、ただ船を待つのではなく、合間にも偉人の歴史、灯台の魅力に触れ、新しい発見をうむ。中央の建物の東西には幅１～3mの壁を配置。そこに展示や島の情報を宣伝するギャラリーウォールとした。壁間を気軽に通り抜けでき、また大屋根の下ということもあり、ゆとりもって過ごせる。

□地域性

中央の棟にはふれあい食堂を設け、その地でとれた新鮮な魚料理を提供。ここでは、観光客だけでなく地元民も味わい、旅人と地域の人との交流を図る。また、この棟は開閉式で、行事ごとにも柔軟に対応。この地では、古くから続く盆踊りもあり、その集まり場にも最適。端にはゲストハウスも設け一日を通して島に、灯台に触れ定着を図る。外観は島の景観を崩さないよう高さを抑え、屋根の波型は、観光客 × 島 × 偉人の３要素が組み合わさり大きな波をうむことを表した。うみに浮かぶこの駅で出会い・発見・やすらぎをうみ活性化をうむ。

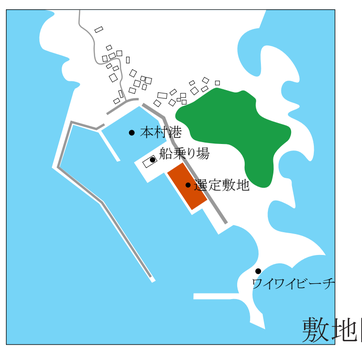
Umi の駅

□偉人：岩松助左衛門

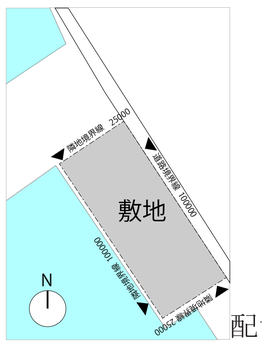
１８０４年生まれの小倉北区出身。1860 年頃小倉近辺の海上では、浅瀬などが多く、特に白州と呼ばれる浅瀬での事故は絶えなかったそう。そこで自らの財産を投資し生涯を捧げ灯台づくりに尽力した。1873 年（明治６年）に完成した白洲灯台は、二代目となった今でも安全の光を灯している。

□選定立地：藍島（本村港付近）

「偉人を顕彰する」ためには記念館またはそれに類する建物を建てればよい。だが、より幅広く人に知ってもらうには不十分であると思った。そこで、実際、灯台に訪れ、島を巡るというクルージングプランを組むことでより多くの人に知ってもらえるのではないかと考えた。計画敷地にした藍島は小倉港から船で 35 分。ここでは海の恩恵を受け、釣りのメッカとも言われるほど魚が豊富。またきれいな海岸もあり、新鮮な海鮮料理を楽しみながら島を堪能する。その中で展示物などにより灯台があることに気づく。そこでクルージングで灯台も巡る。うみを越えて異なる世界・新たな出会いをし、今度はまた海を越えて元の世界に戻る。帰りの時には、そこでの思い出を持ち、また来たいと思わせ、つながりをうむ。



敷地図



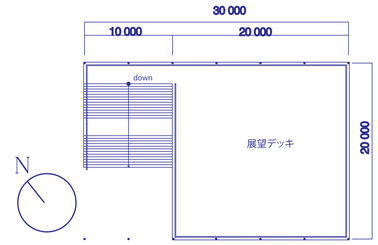
配置図

□藍島の現状

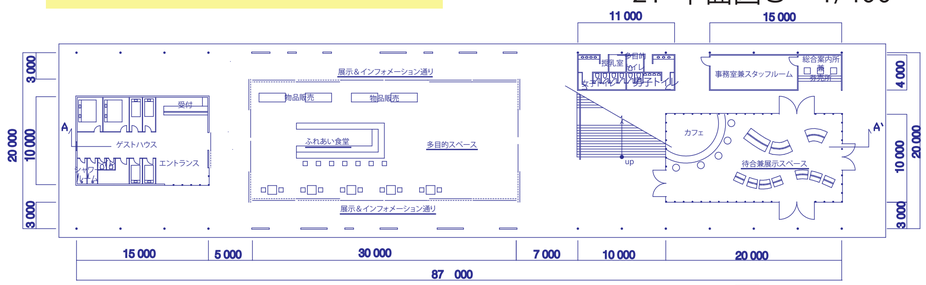
島の問題点として少子高齢化、島の情報を得にくい、トイレや休憩施設が少ない、お土産、食事を楽しむ場がないなどが挙げられており、魅力ある要素を持っておきながら人を迎えるおもてなしの準備が整っていないことに気づいた。そこで休憩スペース、歴史・文化・特産を発信するスペースをつくり、道の駅ならぬうみの駅野作成を目指した。

□面積表

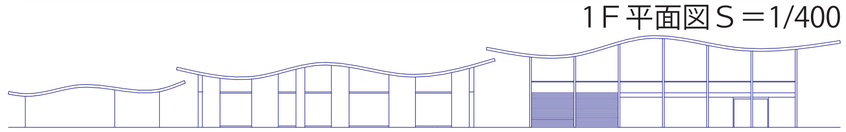
敷地面積：2500 ㎡
建築面積：207.8 ㎡
延べ面積：1374 ㎡
階数：地上２階
構造：S 造
※島での建設につき、駐車場は小倉港。



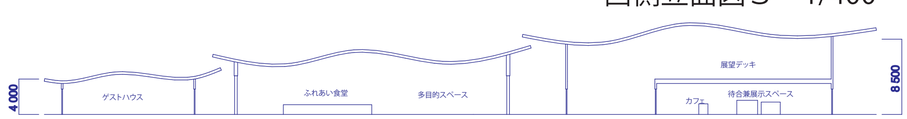
2Ｆ平面図Ｓ＝1/400



1Ｆ平面図Ｓ＝1/400



西側立面図Ｓ＝1/400



A-A’ 断面図Ｓ＝1/400